グローバルにいがた　@世界の街

インド・ムンバイ
月曜掲載

日本語習得 日常会話から





真野　泉さん

新潟市北区出身

私はインドのムンバイで、ボランティアで日本語会話を教えています。

地元の日系企業への就職を目指す大学生や、動画配信サービスのドラマやアニメの影響で学び始めた中高生から、取引先が日本企業という会社経営者、趣味で学ぶ75歳のマダムまで、生徒の年代と学習の目的は実に多様です。

インドの日本語学習者は5万3千人といわれています。ただ、長年学んでいても「日本人と話すどころか、会ったこともない」という方がほとんどです。



生徒は、日本人と会話した経験がないためか、教科書の通りに話します。しかし、教科書通りの応答は、日本語としては正しくても、どこかそっけなく、実際の会話とは少し違和感を覚えます。

アニメを通じて勉強している生徒は、「だぜ」など、教科書にない、日常でも使わない言葉を、せりふの大げさなイントネーションで話しますが、これにも不自然さを感じます。

日本語には、文字で学ぶだけでは理解が難しい言葉もあります。例えば、「いいです」「大丈夫」などは、日常での使い方が教科書とは違ったり、表情やしぐさ、声色で意味が変化したりします。私自身、日本語を教えるようになって、いろいろと気付かされる毎日です。

先日、日本語を学ぶ人たちが日本語の歌を歌うコンテストの審査をする機会に恵まれました。終了後には出場者の皆さんが勇気を出して話しかけてくれました。

日本人である私を前に、緊張しつつも一生懸命話す姿はとてもうれしそうで、そんな姿を見て私もうれしくなりました。せっかく学んでいるのですから、日本人と話してみたいはずです。私と話した経験が、今後の学習意欲につながることを願っています。

生きた日本語会話は、生身の日本人と会話する中でしか学べません。だからこそ、これからも一人でも多くの日本語学習者と会話する機会をつくろうと思っています。

（真野泉さんは1971年、新潟市北区出身。敬和学園高校で15年以上教員を務め、家族の仕事の都合で2023年からムンバイに暮らしています）

日本語会話を学ぶ生徒たち。中央奥の着物姿が真野泉さん

海外で暮らす本県関係者が現地の様子を紹介します。新潟日報デジタルにも掲載。執筆希望はメール(global_niigata@niigata-nippo.co.jp)で受け付けています。